

病理組織検査

斉藤 隆三

病理組織検査の目的は何かといわれれば、診断確定のためという当たり前の答えになるであろう。通常はH-E染色標本にて病理所見から考えられる病理診断を行う。その際に腫瘍のように、比較的特徴的な変化を呈する疾患であれば、患者背景などの他の情報がなくとも大方の診断は可能である。一方で、炎症性疾患では時間とともに症状に変化がみられることがあり、どのような病変のどの部位から検体採取を行ったのか、その情報が必要であり、症状の出現に至った患者背景や臨床検査成績を知ることも診断根拠には重要なことになる。一緒に仕事をしている病理医との話の中で、病理医は皮膚病変、とくに炎症性疾患の診断に苦慮することが多いと聞く。臨床経験の少ない病理医にとって検体がどのような症状を呈していたのかについての記載がない場合には、臨床像が思い浮かばないという。臨床症状をみていない病理診断医にとっては依頼伝票に記載されていることがただ一つの参考情報であり、臨床診断名がつけられない症例ではどのような症状から検体採取を行ったものかについて、現症の詳細な記述が求められる。

症状に動きのある炎症性病変の場合には症状の異なったものがあれば、それぞれを生検することも必要になる。血管炎のように病理組織学的所見が診断の重要な根拠になる疾患では、病変部が確実に採取されていないと、確定診断に苦慮することになるからである。そして、臨床診断が不明な場合では、症状から考えられる鑑別疾患をあげてみることも病理診断医にとっては重要な情報になる。しかし、依頼伝票に鑑別疾患を記載してくれることは大変ありがたいことであるが、それぞれまったく関連性がない疾患が列挙されていることがあり、臨床症状が何であったのか想像するうえでかえって混乱することもある。

病理組織検査の目的の1つに腫瘍性病変では、それが良性腫瘍であるか悪性腫瘍であるかの判断、治療目的で切除された検体であれば病変部が取り切れているかどうかの確認をする判断材料になる。生検されたものか、切除されたものか記載がなく、標本をみても取り切れているかどうかの判断に困る症例があり、手術検体ではどのように切除されたかの情報も重要になる。さらに、病理組織学的所見の中から、疾患の病因にかかわる重要なヒントが得られることがある。

病理組織診断の報告書を受け取った場合には是非自分の目で病理組織標本をみて欲しい。そのうえで、臨床症状と病理組織学的所見との対応を常に行い、自分なりに納得ができるかどうかの確認をすべきである。もし、臨床診断と病理診断に違いがあった場合には、もう一度臨床に戻って症状を見直してみることで、臨床をみる目が変わってくるであろう。

皮膚病理組織検査は診断に直結する検査になり、皮膚科医にとっても標本を自分の目で確かめてみることで臨床をみる目のさらなる向上につながる。皮膚病理組織検査を楽しむようにしたい。